森の芸術祭 GO FOR 2027

私たちのまちが、世界とつながるアートの舞台に！

2027年秋、「森の芸術祭」が高梁市にやってきます！

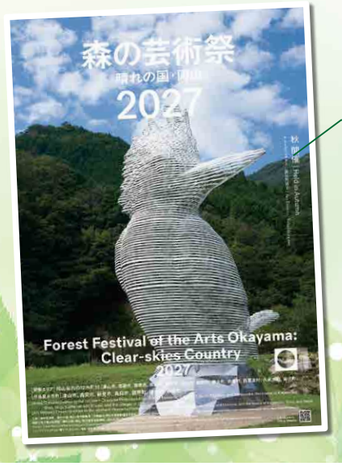
2024年秋に岡山県北部を熱狂で包み、約52万人を動員した国際芸術祭「森の芸術祭 晴れの国・岡山」。大盛況にお応えして、2027年秋に第２回の開催が決定しています。そして次回、ここ高梁市は正式な「アート作品設置市」として、世界的な現代アートの舞台となります！

問観光課　☎21-0217

高梁の魅力×現代アートの化学反応

「森の芸術祭」は、県北部の豊かな自然や歴史ある街並みを背景に、国内外のトップアーティストがその場所ならではの作品を展開する祭典です。備中松山城や吹屋ふるさと村、美しい山々や高梁川のせせらぎなど、私たちが日々当たり前に感じている高梁市の風景。そこに世界レベルのアートが融合したとき、一体どんな新しい景色が生まれるのでしょうか。それは、私たち自身が「地元の本当の魅力」を再発見する瞬間でもあります。

主役は市民の皆さんです！



芸術祭を成功に導くのは、展示される作品だけではありません。国内外から訪れる多くの方々を温かく迎える「高梁ならではのおもてなし」や、市民の皆さん自身がこのお祭りを心から楽しむことこそが、最大の原動力になります。

「アートは難しそう…」と思う方もご安心ください。このコーナーでは今後、芸術祭の楽しみ方やプレイベントの情報、一緒にお祭りを創りあげるボランティアの募集など、２０２７年に向けてワクワクする情報をお届けしていきます。

山田方谷に学ぶ 1

今年（令和八年）は、郷土の偉人・山田方谷が亡くなって一五〇年の節目の年となります。方谷は幕末の備中松山藩で歴史に残る藩政改革を成し遂げた陽明学者にして財政家、教育者であり、民の幸せを願い、次世代を担う人材の育成に尽力しました。

今月号から六回シリーズで「山田方谷に学ぶ」をお届けします。

一、生い立ちと青年時代――

山田方谷は、文化二（一八〇五）年、備中松山藩領阿賀郡西方村（現・高梁市中井町）に父 五郎吉、母 梶の長男として生まれました。本名は球、通称安五郎、方谷は号です。生家は農業と菜種油の製造販売をしていました。神童と言われ、幼い頃に書いた「つる」「天下太平」「風月」などの書が、今も地元の小学校や神社、ふれあいセンターなどに残っています。

五歳（数え年・以下同じ）の時から、新見藩の儒学者 丸川松隠の下で学びます。九歳の頃、松隠塾を訪れたお客から「（坊や）何のために学問をするのか」と尋ねられ、「治国平天下」と答えたというエピソードが伝えられています。

方谷は十四歳の時に母を亡くしています。その頃、師の松隠に「将来の目標を語ってみなさい」と言われ、その答えとして詠んだのが「述懐」という漢詩です。この詩からは、父母と天地の恩愛に感謝しつつ、将来、世の人々のために尽くす仕事を志そうとする方谷の想いが伝わってきます。

十五歳で父も亡くした方谷は、故郷に帰って家業を継ぐことになります。家業に励む傍ら学問も怠らない方谷の優秀さが時の藩主 板倉勝職に伝わり、二十一歳の時、二人扶持（一日玄米一升の俸給）を与えられ、藩校有終館で学ぶことを許されます。

方谷は、二十三歳から二十九歳にかけて、三度にわたり（四年を超えて）京都に遊学します。京では儒学者 寺島白鹿に学び、禅にも関心を寄せますが、二十九歳の頃、王陽明の『伝習録』にめぐり逢い、陽明学に目覚めます。

天保四（一八三三）年十二月、江戸遊学を許され、当代随一の儒学者として名高い佐藤一斎の下で約三年学びます。そして俊英たちとの切磋琢磨の中で自らの陽明学の思想を鍛えていくのです。その一斎塾で方谷は塾頭を務めています。またこの時期、「理財論」（上下二編）を書いています。この論文は政治の大道を論じたもので、その目的とするところは、民生を豊かにすることにありました。

山田方谷肖像（平木政次筆）
個人蔵

天保七（一八三六）年九月に方谷は佐藤一斎塾を去りますが、一斎は別れに「盡己」（わが誠心を尽くす）という書を贈っています。この書は今も大切に山田家に伝わっています。

帰藩した年の十二月、藩校有終館の学頭となります。そして、有終館の学頭を務める傍ら、家塾「牛麓舎」を開き、武士と庶民の垣根を越えて教育に専念しました。弟子たちの中から、大石隼雄、進鴻渓、三島中洲など、のちに藩を支える重要な人材が育っていきます。

その後、方谷は世子・板倉勝静の教育係になります。これが、のちに「水魚の交わり」と称される二人の運命的な出会いとなるのです。

（文・渡辺道夫）

高梁市の市外局番は「0866」です